

フランス語導入教育の問題点と改革の試み 2010

文学部教授 樋口淳

0. はじめに、

本稿は、3つのパートに分かれています。

まず1の「フランス語導入教育の問題点」と2の「到達目標の設定とその実現」は、大学におけるフランス語を含めたいわゆる<第二外国語教育>の現状を報告したものです。

つぎの3「CALL教育の利用と教材の開発」と4「ごく私的な試みの軌跡」は、<第二外国語教育>のなかで、<CALL>というコンピュータ利用システムのなかで何が出来るかについて考察したものです。ここまでは、前回の授業報告と同じです。

私は、今回の報告に当たって5「**2010年度問題の解決**」という項を付け加えました。これは、ネット教材作成の現状と問題点について報告したものです。

したがって、すでに前回の報告を御存知の方は、5「**2010年度問題の解決**」のみ、お目通しいただければ幸いです。

1. フランス語導入教育の問題点

フランス語にかぎらず、韓国語であれ、ロシア語であれ「大学に入って初めて学ぶ外国語」を教える教員は、共通の悩みを抱えています。たとえば、私の担当する「フランス語初級構造」という文法の時間は、わずか1週間に1回の授業、それも90分の授業が年間に多くても30回、合計45時間しかありません。これで、発音から始めて条件法、接続法といった非現実的な仮定や丁寧表現、話し手の願望や危惧を表す主観的な表現まで教えないといけないのです。これでは、繰り返しの余裕がありません。とにかく決められた回数の授業の中で、プログラムにしたがって必要最低限の情報を与え、理解させなければならないのです。

もちろん「フランス語初級構造」は孤立した科目ではなく、1年次では運用を中心とした「フランス語初級基礎」が必修であり、もし希望すれば「フランス語初級会話」を選択することもできますから、合計135時間程度の授業を履修することができます。

2年次に入ると「初級構造」の延長として「中級総合」があり、「読み」「書き」「聞き」「話す」能力のいずれかに特化した「中級演習」とペアになっています。希望する学生は、この「中級演習」を複数履修することもできますし、「中級会話」を選択することもできます。

3年次以降は、やはり選択科目として「上級演習」があるだけですが、これも複数展開されていますから、必要に応じて履修することができます。

さらに、春期には通常授業以外の1ヶ月の語学研修プログラムが、国際交流センターの主催で開かれていますし、毎年5名程度を限度として、学生を1年間の長期留学生として協定校のリヨン大学に派遣しています。語学研修のみの6ヶ月の中期留学も検討中です。

私は、かつて、こうしたプログラムのもとで学ぶ学生を3つのタイプに分けてみたことがあります。

第1のタイプは「新しい外国語」を1年でやめてしまいます。

第2のタイプは、海外語学研修や留学制度を活用して、きわめて積極的に「新しく始め

た外国語」を学び、自分のものにしていきます。

第3のタイプは、その中間で、すぐに海外に出かけて、留学や語学研修に挑戦したりはしないけれど、「新しく始めた外国語」に対して深い関心があり、なかには検定試験を受験して3級程度をパスしてしまう。場合によっては、学校の制度以外の語学留学に挑戦してしまう学生です。

いま、これを読み返してみると、少し言葉が足りなかったように思います。

私は、フランス語の教師ですから、つい第2のタイプをよい学生で、第1のタイプの学生は困ったものだと思いがちなのですが、それは大変間違っています。

これら3つのタイプの学生には、それぞれ優れた学生がいます。とにかく、1年の長きにわたって一つの授業を履修するのですから、学生がなにかをそこから学び取ることができなければ、それは教師が悪いのです。

教師は「たった1年で90時間（あるいは45時間）しか学ばなかった外国語がなんの役に立つのだ」と開き直れる立場にはありません。

2. 到達目標の設定とその実現

さて、それでは「たった1年で90時間（あるいは45時間）しか学ばなかった外国語」は、なんの役に立つのでしょうか。これは、けっこう根源的な問いで、「大学で学ぶことに、意味があるか」とか、さらには「学ぶことに、どんな意味があるか」というのと同じくらい、簡単には答えられない質問です。

そこで、ここではとりあえず、「語学はスキルである」という最もシンプルな地点に立って（「スキルとはなにか」などという難問はカッコにいれて）、到達度を共通目標として問題を立て直してみましよう。

幸い「大学で始める新しい外国語の問題」はどここの大学でも共通ですから、外部環境は整えられてきつつあります。フランス語の場合は、「実用フランス語技能検定試験（以下「仏検」）」が実にきめ細かい配慮を示しています。

まず仏検5級は、「標準学習時間：50時間以上（大学で、週1回の授業なら1年間、週2回の授業なら半年間の学習に相当）」ですから、Semester制の場合でも「フランス語初級構造・基礎I」を修了した時点で受験可能です。

仏検4級は、「標準学習時間：100時間以上（大学で、週1回の授業なら2年間、週2回の授業なら1年間の学習に相当）」ですから、1年間きちんと勉強した学生には、資格取得が視野にはいります。

仏検3級は、「標準学習時間：200時間以上（大学で、第一外国語としての授業なら1年間、第二外国語として週2回の授業なら2年間の学習に相当）」ですから、中級履修者が対象となります。

この検定試験のレベルに、留学や語学研修のレベルを合わせます。つまり、春期の語学研修は、1年次の修了した春に参加するのが最適ですから、秋に行われる選考試験には仏検5級程度を基準にすればよいわけです。

長期の1年間留学や、今後検討されるはずの6ヶ月の中期留学には、仏検3級程度を選考の目安にすればよいのです。

こうしたシンプルな到達目標を設定することで、2つの大きな問題が解決できます。

1つは、新しく外国語を学ぶ学生たちが、1年間、あるいは半年の学習で「自分たちがどこまで到達できるのか」を明確に知ることができます。学生たちの中で、実際に仏検を受験するものは少数ですが、その数が少しずつ増加しているのも確かです。自らの到達度を自覚することで、次のステップの準備ができるだけではなく、他者に対して「自分のフランス語のレベルは、この程度である」と説明できることもよいことです。

到達目標を設定することの、もう1つの大きな利点は、教える側の共通理解を形成するのに役に立つということです。現在、専修大学のフランス語教育スタッフは24名で、そのうち専任教員はわずか3名です。それに対して、毎年4月に新しくフランス語を学び始めようとする1年生は500名を超えます。

大学の教員は、教育と研究のプロですが、それぞれの教員が教育と研究について持っている考え方や教授スタイルは、それぞれ違いますし、その違いは必ずしもマイナスではありません。教員の独自性が生かされないと、よい教育ができないのです。

しかし、「新しくフランス語を学び始めようとする1年生」は、どのクラスで勉強しても、同じレベルの知識を身につける権利を有していることも当然の事実です。特に1年生の「初級フランス語構造」の場合には、1年間に教授される内容が保障されなければならないと思います。実用フランス語技能検定試験の5級、4級、3級というレベルの設定は、これまで常識的に「ここまで教えればいい」と個々の教授スタッフが考えていた到達点を、きわめてシンプルに提示し、少なくとも「ここまで教えなければいけない」という合意を形成しやすくなったと思います。

3. CALL 教育の利用と教材の開発

フランス語にかぎらず、すべての外国語教育は、伝統的には学生と教師と教室と教科書があれば、どこでも可能です。しかし、その一方では、教育ツールのマルチメディア化が進み、教材も教室もコンピュータのお世話になることが多くなりました。

本学の場合も、1号館地下にはCALLと呼ばれる最新のコンピュータシステムを備えた教室があり、2006年からは10号館にも外国語学習用の情報エリアが、オープンしました。こうした新しいシステムを利用することには、常に試行錯誤がともないますが、とにかく使ってみる必要があります。新しいCALLシステムに、「新しく始める外国語」の習得をどのように支援させたらよいのでしょうか。

私は、これにも2つの方向があると思います。

ひとつは、学生自身の外国語学習のための自習支援です。大学で教えるあらゆる学問は、入り口でしかなく、授業や演習で学ぶきっかけを掴んだ学生は、自分で関心を広げ、知識を深めていかなければなりません。特に外国語の場合は、1000時間とか、3000時間とか、5000時間とか言われるトレーニングが必要だといわれています。

これまでに、カセットやビデオなど、新しい機器が開発されるたびに、じつに多様な学習支援ツールが開発され、学習環境が整備されてきました。学生たちは必要に応じて、ツールを選択し、効果的に使用してきたと思います。

しかしコンピュータを核とするCALLシステムは、これまでの学習支援ツールを総合し、より効果的に自主的な学習を支援することができます。授業は、1年間にわずか100時間から150時間なので、これを1000時間から1500時間の学習に広げてあげる、場合によっては遊び感覚で学べるシステムの開発が必要とされています。

ふたつめは、教える側の教授法の革新です。教える側の教師は、週に1コマか、多くて2コマしか同じ学生の参加する外国語授業を担当していませんから、せいぜい年間45時間から90時間の付き合いにしかすぎません。たとえば「フランス語初級構造」の授業は、どうがんばっても50時間で、教えられることは限られています。一般的には、1年間とにかく根気よく授業を運営し、学生を励まし、これからの勉強法などを指南していれば、「よい先生」ということで自他共に安心していられたように思います。

しかしCALLの時代になると、少し事情がちがってきます。もちろん、大切なのは50時間の生の授業なのですが、それに加えてヴァーチャルな授業支援が大切になります。ライブで行った授業のデータを蓄積して、反芻させる、あるいは予め学習させ、学習時間を500時間にするという可能性が生まれてくるのです。

こうした試みは、これまでの教科書やカセットやビデオやCD-ROMや、場合によってはDVDという既存の媒体の組み合わせで可能ではないかという反論も、もっともですが、CALLは少しレベルの違う問題を提起しているように思われます。その違いは、一言でいえば「簡単だ」ということで、もう少し言えば、どこにでも持ち歩ける「ユビキタス」な機能をそなえているということと、「コスト・パフォーマンス」がよいということに尽きると思います。

たしかに、CALLシステムから発信される学習支援は、初期投資はたいへん高価なものになりそうです。これは、機材が高価であるということもありますが、それよりも教材の作成に時間がかかり、一見「コスト・パフォーマンス」が悪いのです。しかし、いったん作ってしまえば、学内のローカルネットでは、学生も教員も、誰でも利用できます。また、もしインターネットに公開してしまえば、学外から誰でもアクセスできます。

従来のような教材の購入費とか、図書や資料の貸し出しの手間とか、入館時間の制限とかが一切ない。将来、もしケイタイでアクセスできる教材が開発されれば、通学の最中にゲーム感覚でフランス語を勉強する学生も登場することでしょう。CALLのシステムは、こうした様々の教材を、既存の紙媒体のものをも含めて、1つのシステムにまとめることを可能にします。

これは、最終的には、学生を「授業」や「教室」に縛り付けない方向に進み、教師と学生という「教えるもの」と「教えられるもの」との関係を変えてしまうことにも

なりそうです。

4. ごく私的な試みの軌跡

私は、以上のような CALL の可能性について、以前から予測していたわけではありませんが、1996年3月に「こんたくとフランス語文法」というあまり売れない教科書をつくりました。この教科書は、12課からなる実に保守的なスタイルで、要するに週1コマ、1年間でフランス語文法を一通り概観するというものです。

私が、この教科書に関して唯一他と違うと誇れるものは、CD-ROM の存在です。そこには、私が1年間で教えたいと考える内容が、すべて詰め込まれています。

たとえば、第5課の人称代名詞の説明と練習問題をみてみましょう。

The screenshot shows a software window titled "Contact フランス語文法". The main content area is titled "Leçon 5" and "23 人称代名詞 (pronom personnel)". A pop-up window titled "辞書・解説" provides an example: "Marie aime bien les fleurs. (Elle les aime bien.)" and explains that "les fleurs" is the direct object, so the pronoun is "les". Below this, a table lists pronouns: "vous", "ils", "elles", "les", "leur", "moi", "toi", "lui", "elle", "nous", "eux", "elles". A diagram shows the placement of pronouns: "主語 (ne) — [me, te, nous, vous] — [le, la, les] — [lui, leur] — 動詞 (pas)". Two examples are given: 1. "Marie aime bien les fleurs. (→ Elle les aime bien.)" and "Paul donne cette rose à Marie. (→ Il la lui donne.)" 2. "Françoise aime-t-elle ce tableau? (→ Françoise l'aime-t-elle?)" and "Non, elle ne l'aime pas."

図 1

CD-ROM の第5課を開くと、図1のようなページがあらわれて、肯定文の書き換えの説明をしてくれます。もちろん、例文を読んでもくれますし、単語ごとにも図2のような辞書がついています。



図 2

さらに、練習問題の解説もしてくれます (図 3)。

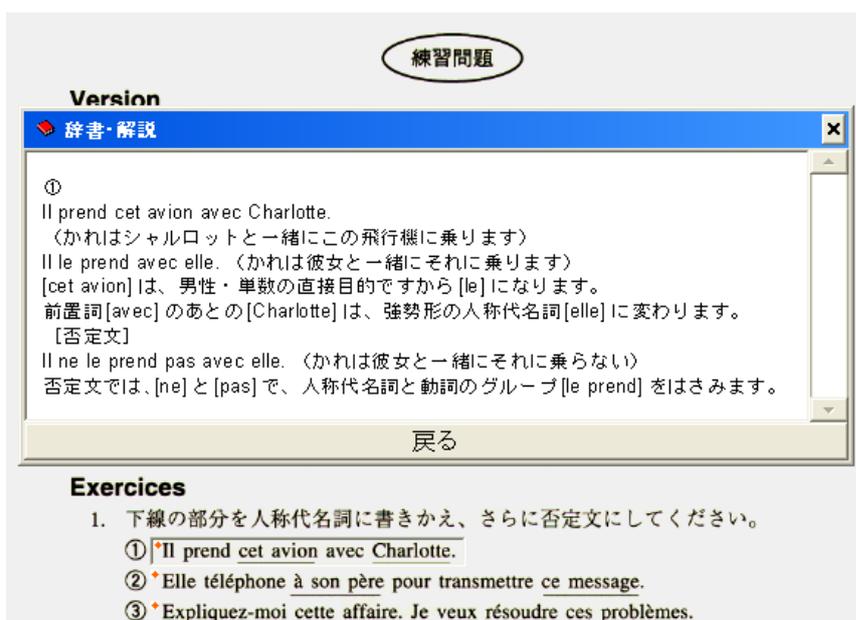


図 3

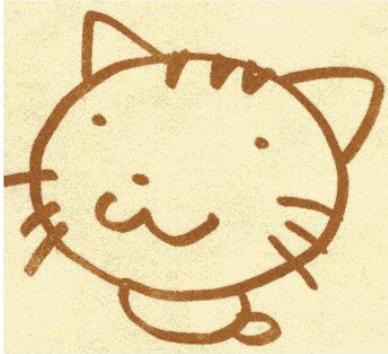
この CD-ROM の次に、私が試みたのは、OPUS という優れた問題作成ソフトを利用して、インターネットのサイトを開くことです。

<http://www.isc.senshu-u.ac.jp/~thb0309/Contact/IndexContact.html>

というアドレスをクリックすれば、大学からでも、自宅からでも図 4 のようなサイトにたどり着くことができます。

マルチメディア ふらんす語教室

🌟 こんたくとふらんす語文法と読本の支援ページです



はじめてふらんす語を学ぶ、みなさんのための支援ページです。

「こんたくとフランス語文法」と「読本」、それにCD-ROMをつかって、ふらんす語の世界を探検しましょう。

このホームページには、ふらんす語の学び方や練習問題だけでなく、検定試験や留学の情報もあります。

みなさんの参加をお待ちしています。どうぞ、ご意見をお寄せください。

あなたは、43773人目の訪問者です。

図4

このサイトでは、授業で行う練習問題が、多少の技術的制限はありますが、ほとんどすべて書き込み式で予習・復習できます。

同じ第5課の人称代名詞の練習問題を開いてみましょう。図5のように空欄に答えを入れてみます。

Versionの復習

人称代名詞を入れましょう

代名動詞の練習

41から60までの数

語彙をふやそう

練習問題

確認の問題

[問い] つぎの問題文の下線部に相当する人称代名詞を、解答文の空欄に入れてください。
[合格基準 100%]

1. Il prend cet avion avec Charlotte.
(解答文1) Il le prend avec elle.

2. Elle téléphone à son père pour transmettre ce message.
(解答文2) Elle lui téléphone pour le transmettre.

3. Expliquez-moi cette affaire. Je veux résoudre ces problèmes.
(解答文3) Expliquez-moi. Je veux résoudre.

4. Ne m'expliquez pas cette affaire. Je ne veux pas résoudre ces problèmes.
(解答文4) Ne me expliquez pas. Je ne veux pas résoudre.

答えを表示する

図5

そうすると図6のように、採点して、正解を表示してくれます。

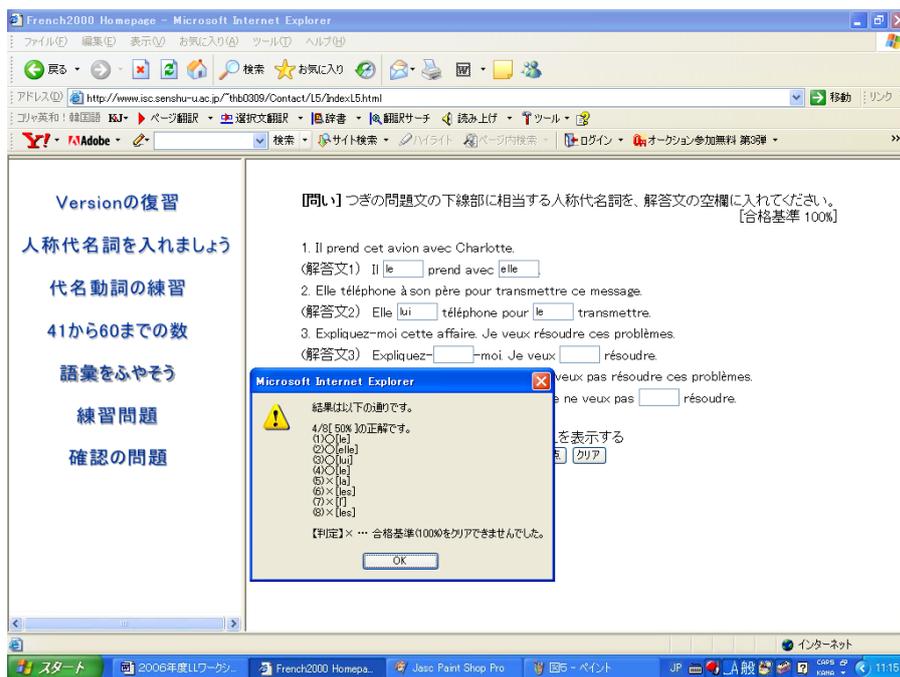


図 6

このサイトでは、各課で学ぶ語彙のチェックを、やはり書き込み式でおこなうことができるようになっていました。

以上2つの試みは、実は CALL というシステムの外で行われていることでした。もちろん、この2つのタイプの教材を CALL 教室のコンピュータで学生個人にためさせたり、プロジェクターで映し出して解答を示したりすることはできます。しかし、それではまだシステムの内部に十分に参加しているとはいえません。

そこで、私が 2005 年から旧システムのなかではじめてしたのは、外付けのサーバーを CALL システムにつないで、ローカル・ネットワークで学習する学生たちの学習記録をとれるようにしたことです。

作業自体は、きわめて単純で、インターネットで公開していた OPUS の教材を、そのままローカルネット用に改変し、学生たちが ID とパスワードを使用してサイトにアクセスすることができるようにただけです。

しかし、この単純な作業によって、授業時間帯に学生たちが、いちいち黒板まで出てきて練習問題を書かなくてもすむようになりまし、予習してきた一部の学生だけではなく全員が参加するかたちの授業が可能になりました。

また、授業時間以外の時間帯にも、学生たちがこのプログラムにアクセスして予習・復習をすれば、教師はそれをチェックできます。

なんだか、オーエルの『アニマルファーム』を外国語学習に引き写したようなディストピアの印象もないわけではありませんが、それも使い方次第だと思います。

以上は、私が 2006 年 9 月までに行った、旧 CALL システム内部での試行錯誤ですが、つぎに 2010 年 4 月以降の新しい状況についてお話ししたいと思います。

5. 2010年度問題の解決

5-1 ウィンドウズ7の登場

2010年4月に直面した大きな問題は、ウィンドウズのOSがVistaから7に進化したことです。OSという商品の変化によって授業の運営が左右されるというのは情けない話ですが、私が共同開発したCD-ROMが7のパソコンでは起動しなくなってしまったのです。

従来から、多くのエンド・ユーザーが経験してきたとおり、OSの進化にともなってCD-ROM作成ソフトが進化し、従来バージョンのソフトで作成されたCD-ROMが起動しなくなることは一般のことです。しかし私のように貧しい零細以下のソフト製作者にとって、これは致命傷なのです。

とくに私たちの大学では、2010年4月から学生達の使用する情報科学センターの1500台ほどのパソコンがすべてOS7に進化しまいました。

そこで、私は二つのことに着手しました。一つは、当然のことながらDD-ROMのリニューアルです。

幸いなことに、15年以上前にこのCD-ROMの開発に携わってくれた開発パートナーが、昔の友を見捨てずに努力を重ねてくれたおかげで、2011年1月2日によりやく新しいプログラムが完成し、私は1月7日締め切りのこの原稿執筆に着手することができました。「なんだそうだったのか、それほど悩むことはなかったんだね」というお叱りを受けそうですが、この問題が解決しなければ、2011年度の授業展開はまったく変わったものになってしまっていたはずです。実際は、まさに綱渡りの連続でした。

5-2 ネット授業 Contact Direct

私が手がけた二つ目の作業は、CD-ROMが使用できなくなった場合を想定した、インターネットでの授業サポート強化ですが、この企画は「CD-ROMが使えないなら、授業をまるごとネットで流してしまえ」という、いつもの通りの安易な発想に支えられています。 図7

私は、まず図4のマルチメディアふらんす語教室のページに「Contact Direct」というボタンを付け加えることから始めました。(図7)

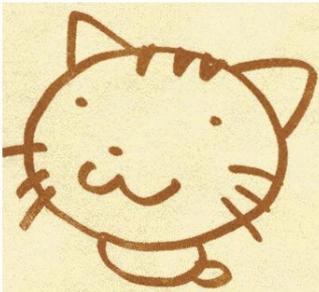
そしてこのアイコンをクリックすると、図8のContact Direct フランス語レッスンのページが表示するようにリンクをはりました。



Premier Contact

マルチメディア ふらんす語教室

Contact Direct フランス語レッスン



Contactフランス語のCD-ROMを利用したフランス語授業のページです。

「こんたくとフランス語文法」のCD-ROMをつかって、フランス語発音の仕組みやふらんす語の文法の世界を詳しく学びます。

第1課から第12課まで、まず一歩ずつ進んでみましょう。そして、分からないところは何度でも聞きなおして見て下さい。

授業の画面を大きくして見たい場合など、操作の上で分からないことがあれば「Contact Directの利用上の注意」のアイコンをクリックして参考にして下さい。

みなさんの参加をお待ちしています。どうぞ、ご意見をお寄せください。

(図8)

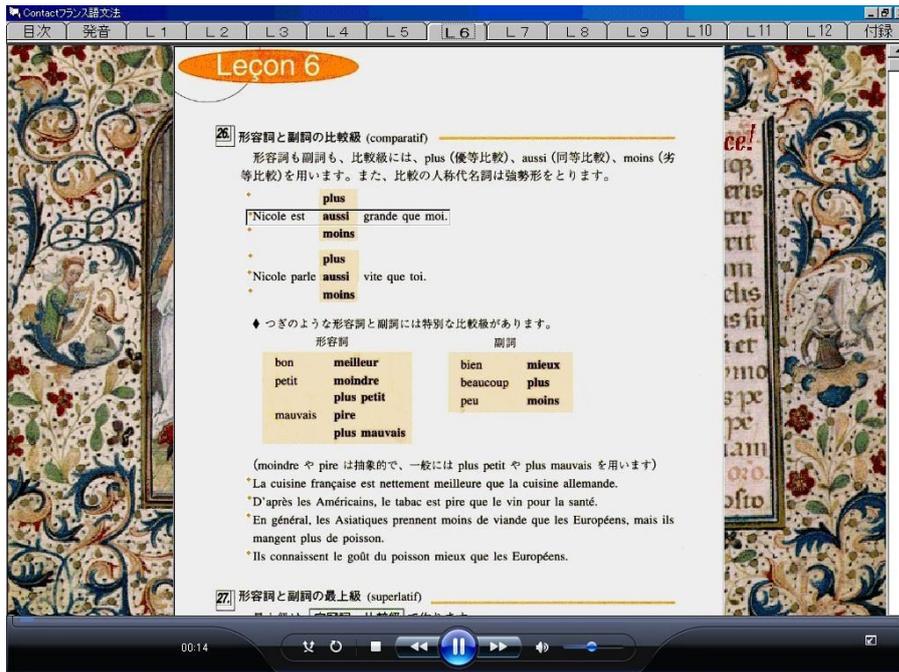
このページの下には、図9のような各課ごとの目次がついています。



この目次のたとえば「第6課の授業」を開くと、図10のように「形容詞と副詞の比較級」「最上級の作り方」「量表現する副詞」「形容詞の一致の例外」「男性第2形をもつ形容詞」という6つのテーマが下位区分として登場します。



この目次から、たとえば「形容詞と副詞の比較級」の項をクリックすると図11のような場面が現れて、CD-ROMの画面の背後から私の説明の音声が出てきます。



(図 11)

私が、このビデオ・クリップを作成するのに用いたのは LL 研究室の教材作成ソフト「ストリーム・オーサー」です。

私は、すでに 2006 年 12 月のワークショップの折に、このソフトを利用して教材を試作したことがあります。その時は、ビデオカメラを利用して、私自身がガリザとガスパールというキャラクターとともに登場し「今日は、フランス語の発音について勉強しましょう」という具合に教材の趣旨から説明しています。(図 12)



(図 12)

つぎに、今回と同じく CD-ROM を操作しながら、フランス語の発音について、導入的な説明をして、音声のみで説明しました (図 13)

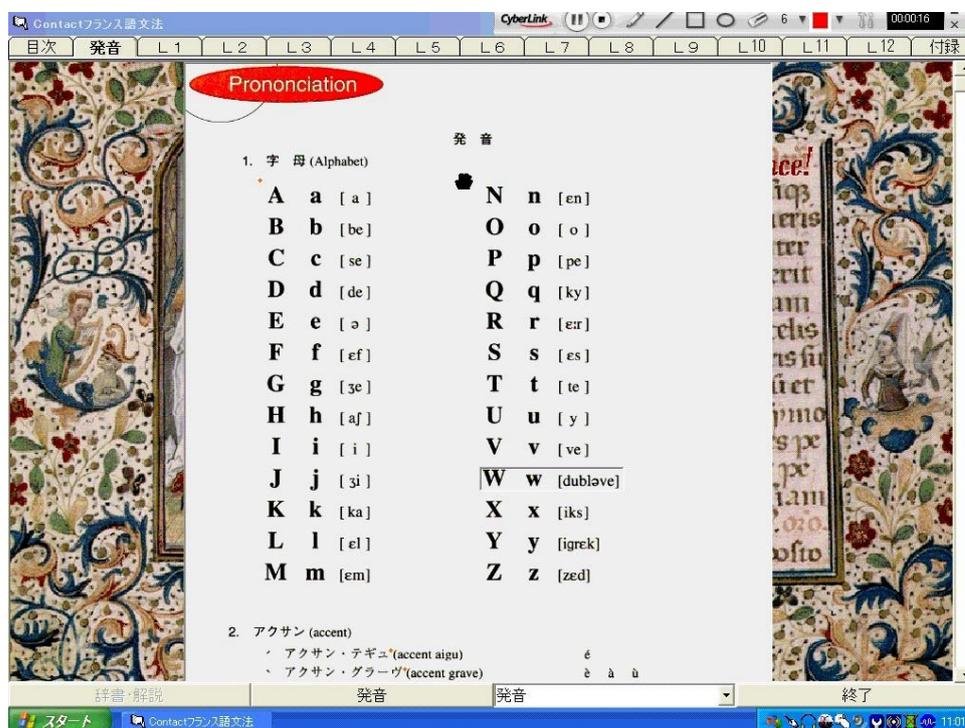


図 13

そして最後に、もう一度、ビデオカメラに向かって、フランス語の発音について授業で行うのとはほぼ同じ程度の説明を行いました。

「ストリーム・オーサー」は、この程度のことが簡単に出来てしまう優秀な教材作成ソフトなのですが、今回、私自身の登場を断念した最も大きな理由は、図 12 のように私がまったく魅力のないキャラクターだからです。

教室とちがって、ネットで展開される授業には、少なくとも「ハーバード白熱教室」のサンデル先生のようなカリスマ性か、さもなければ魅力的なアシスタントの協力が欠かせません。私は、テレビの放送大学の授業をよく聞きますが、だいたい途中で飽きてしまいます。ラジオの放送大学のほうが、ずっと面白いのです。

テレビのように映像がともなう場合は、映像によってさまざまなデータを提供できますから、ラジオに比べて情報量が豊富で面白いはずなのですが、テレビ版の放送大学は退屈です。

せっかく画面上に面白い情報を提示しても、その前後に「先生」が長々と登場して、情報の鮮度を落としてしまうことが少なくありません。そこへいくと、ラジオの場合、先生は徹底して「情報の黒子」「かくれた情報提供者」として身を隠すことができる、という利点があります。映像による情報提供には、それにふさわしい演出が必要なのであり、サンデル先生の陰にも、実はたくさんのスタッフが働いていたはずで

そこで今回、私は CD-ROM の映像のうしろにすっぽり隠れることにしました。そうすれば、視聴者は必要な情報を映像で確かめながら、同時に音声によって情報を捕捉することができるはずで

タントや有能な演出スタッフを雇うお金もない私は、春休みと夏休みに1号館地下の要塞のようなLL教室にたてこもるだけで、10課分の録画を終えることができました。あと2課で完成です。

もちろん、このチョー地味な作業の遂行のためには、「ストリーム・オーサー」の操作はおろか、LL教室のパソコンの仕組みにまで不案内な私が、LL教室の有能で寛大な事務スタッフの援助に支えられたことは、いうまでもありません。

5-3. 残された課題

以上が、私のフランス語授業の現状報告なのですが、「CD-ROM が使えないなら、授業をまるごとネットで流してしまえ」という、例によって軽い気持ちで始めた作業の遂行の上で、気がついた幾つかの問題に触れてみたいと思います。これは、現在の本学の環境でネット教材を作成してみようとする教員なら、誰でも直面するに違いない問題だと思います。

5-3-1 教材作成室の問題

今回の教材作成にあたって、私は1号館のLL研究室のD教室を利用して教材を作成することができました。しかし、この教室は「ネット教材作成専用」ではないために、授業のある時間帯は利用できないという問題点があります。春夏の休暇期間を除いては、LL教室は授業でほぼ満杯ですから、教材作成はその合間をぬった<季節労働>に頼らざるを得ないのです。

今後、もし多くの先生方がインターネットを利用して研究・教育の成果を公開しようとなさる場合には、「ネット教材作成室」あるいは「コンテンツ作成室」が必要とされるでしょう。しかし、そのために大きな教室は必要ないと思います。当面は、予約によって3時間程度の連続利用が補償される、20平方メートル程度のスペースが1つあれば十分ではないでしょうか。

5-3-2 教材作成ハードウェアの問題

この「ネット教材作成室（仮称）」のためには、当然のことながらコンピュータなどの教材作成のためのハードウェアが必要とされます。しかしこれも、初期的には、情報科学センターで使用されているようなごく一般的なコンピュータと、比較的性能のよいマイク、および市販のビデオカメラ1台があれば足ると考えられます。

5-3-3 教材作成ソフトウェアの問題

3番目は、ウェブ教材作成のためのソフトウェアの問題です。ちなみに、今回私は、LL教室に導入されているCyber Link社の教材作成ソフトStream Auther3.5と0PUSを使用しました。いずれも5年以上前に作成されたソフトであり、現在では、更に廉価で、使い勝手の良いものが出来ていると思われます。ネット教材作成が「あたりまえ」になりつつある昨今では、共同利用可能な手ごろなソフトが簡単に調達できるはずで

5-3-4 教材公開用サーバーの問題

最後に、作成されたネット教材（コンテンツ）を公開するためのサーバーの問題が残ります。私は、「マルチメディアふらんす語教室」の公開のために、ある時期まで情報科学センターのサーバーのみを利用してきましたが、情報科学センターの規定では教員に個人的に割り当てられた容量は2ギガまでで、それ以降は1ギガごとに申請が必要で、しかも有

料となります。

私は、現在、情報科学センターにお願いして1ギガを増設し、合計3ギガを利用していますがほかにも科研費で作成した「研究成果公開」などの作業もあり、「Contact Direct」の公開のためには容量が不足し、LL研究室のサーバーを併用させていただくこととしました。しかしLL研究室のサーバーの使用にも上限があります。

私のケースは、一つのサンプルにすぎませんが、今後、教員がネット教材を作成し、インターネット上に公開することが進めば、同じ問題が繰り返されます。こうした場合に備えて、情報科学センター等に「ネット教材公開用サーバースペース（仮称）」を整備し、作成されたネット教材の性格を、ある基準を定めて審査した上で、無料でサーバー使用を許可し、アップロードと公開の許可を与えることが必要とされると思います。

20世紀の終わり頃、協定校のネブラスカ大学の経営学部を訪ねた私は、ネット教材作成用のスタジオを見学させていただいたことがあります。当時は、それが最先端だったらしく、案内してくれた先生方も誇らしげでした。しかし私はその施設のあまりに手軽な作りに驚いた記憶があります。まるで中学や高校の放送室のようなガラんとした部屋に机とマイクとビデオカメラがあるだけで、コンピュータも市販のものが一台、その辺にポンと置かれていただけだったのです。専修大学LL教室のマスター・コンソール付きの立派な施設になれた私の目には、簡略すぎるように思われました。

しかし今になって考えると、それでよかったのだと思います。何もかもそろった重装備の施設を業者に頼んで作ろうとすると、時間とお金がかかります。しかし必要なのは、発信する教材の質と量と、作成のスピードです。あまり施設が立派だと、教材作成にも、まずマニュアル読破から始めなければならないでしょう。私のようなアナログ人間には頭の痛い話です。

おそらくは、ネブラスカ式の手づくりの方が、手早く、使い勝手もよく、利用率も高まるに違いないと考えるのですが、いかがでしょうか。